

マックス・フリッシュ『自伝』1984年版の日本初演について (I. Terao) [J]

三十有余年の大学業務を「楽しく」過ごし、最後の一年はシミジミと終えるはずであったのに、突然のコロナ禍が襲ったのは、すでに二年以上前のことになる。二〇二〇年の二月ごろの横浜港クルーズ船のニュースによって危機感が高まり、二月二十八日の国際交流委員会と翌二十九日の学会での会合を最後にして、三月以降の予定にはことごとく斜線がつけられた。卒業式も入学式もすべてが中止されて、新年度の四月七日に第一回目の緊急事態宣言が出された。もちろん学生の登校は禁止、会合も中止と Web 化の対応に直面して、大学の諸機関および各人各様で混乱を極めた。五月からは授業も全面 Web 化するとの方針が出されたものの、なにしろ「グーグル・アカウントって何だ？」という昭和のジジイである。IT 関係の種々のマニュアルは最初の一行目からチンプンカンプンのカタカナ語の羅列で、ほとんど悪夢としか思えない日々の始まりとなった。

何度やっても次に進まない PC 操作にイラついて、呪いのオタケビが何度も何度も部屋中に響く。ほとんどヒステリーを起こしかねまじき当初の混迷と混乱にもかかわらず、初歩的なミスと質問に対して、忍耐強いサポートの指導と解説がなされ、マニュアルの改善とシステム化も必死で進められた。同僚諸氏の彼女らへの深い感謝の念と、教育施設としての大学の底力と人間力とを強く感じたことは強調しておきたい。

四月には基本となるグーグル・クラスルームの操作理解に時間がかかった。五月に入ってから、講義資料の画像化や映像化に時間がかかった。音声や画像の処理ソフトというものは、凝れば凝るほどに内容が良くなるので、際限なく時間を食いつぶす傾向が顕著である。果てしなく続く試行錯誤の繰り返しのおかげで、夕方になるとグッタリと疲れる。眼はショボショボするし、首も背中も腰も痛くなるし、PC 画面を見ると吐き気まで催してくる。

後期の九月には週に一度だけの対面授業が始まったものの、これも十月末には再び Web に戻されて等々、まだまだ言い足りないのだが、そもそもの趣旨からは逸れすぎてしまう。実は二年半もの巣ごもりの日々の後、少なからず見ごたえのあった観劇について紹介するために、ひどく長すぎる前置きになったのは、もちろんコロナ禍への恨みつらみの強さのためではあるのだが、同時にその上演を通して、想定外の危機に対する演劇美学的な表現の可能性が強く示唆されていたようにも思えたからである。

それがデュレンマットと共にスイスを代表する作家マックス・フリッシュの『バイオ・グラフィ：プレイ』であり、本作は松鶴功記の本邦初訳、矢野靖人の演出で、二〇二二年六月九日から十二日まで、世田谷パブリックシアターで初上演された。

小劇場(シアターラム)の空間を生かして、客席と共有する舞台空間の中央が主舞台で、白黒の絨毯の上に真っ赤なソファとミニ・テーブルの置かれた居間となっている。右の壁際にはコート類のぶら下がった衣装掛けと、酒壇などの入ったサイドボード、小机と椅子など、ここは居間とつながる空間なのだが、左の壁際には会議用の簡便な長机と椅子のセットが

横に二つ並べられて、まったく位相の異なる空間となっている。さらに舞台を囲む壁の奥の正面が横に二メートルほど切り取られ、出入り口らしき暗闇が天井まで続いている。その横に白い枯れ木のオブジェ、さらに仮縫い用の首なしマネキンが三つ、左右と奥に立っており、主舞台の居間とは異なる象徴的な雰囲気を醸し出して、舞台空間全体の多義性・多層性がなんとなく暗示されている。

やがて赤いソファには、眼鏡をかけた若い女性が一人、所在なげに座る。若い男性と中年女性のアシスタントが二人、左隅の机に座り、さらに中年男性の二人（演出家とキュアマン）が、左手前に並んで立つ。以下、意表を突いた冒頭場面を少しだけ例示して、この作品の舞台空間の醸し出す現代演劇的な雰囲気を少しばかり感じて頂きたい。

演出家：灰皿はある？

アントワネット：いいえ、無いわ。

演出家：なんで灰皿が無いんだ？

（アシスタントが灰皿を持ってくる。）

アシスタント：すみません。

（アシスタントは三つの灰皿をあちこちに置いて、主舞台から下がる。女性アシスタントが書類の頁をめくって、それから読み上げる。）

女性アシスタント：「客たちが帰った後、彼女はただそこに座っていた。夜中の二時に帰ろうともせずに、ただ黙って座ったままの見知らぬ女性を、どのように扱えば良いのだろうか。こんなはずではなかった（Es mußte nicht sein.）・・・」

キュアマン：こんなはずではなかった。

演出家：キュアマンさん、あなたの上着をください。

キュアマン：どうぞ。

（演出家がキュアマンの上着を着る。ゴングが鳴る。演出家はキュアマンとして登場する。）

アントワネット：すぐに帰ります。

（沈黙。彼は仕方なく立ったまま、やがてグラスや壺、灰皿をかたづけて、再び所在なく立つ。）

演出家：気分でも悪いのですか？

アントワネット：その逆です。（紙巻きたばこを取り出す。）タバコを一本だけ。（火を期待するが応えられない。）お邪魔でなければ。（タバコに火をつけて、ふかす。）とても楽しかったです。素敵な人たちが多かったし、刺激的でした・・・
（沈黙）

アントワネット：飲み物はまだ何かありますか？

まずは演出家とアシスタントとの灰皿をめぐる舞台外のやり取りと、続いて女性アシスタントによる状況説明の書類の朗読が、いわばプロローグの扱いなので、引用の中頃に現れる「ゴングが鳴る。」以降から、本筋のドラマが始まる。ただし「演出家はキュアマンとして登場する。」

初対面の二人はぎこちない対話を続けながら徐々に親しくなるのだが、その過程で、行動学者キュアマンの教授昇格お祝いパーティーの後という、さらなる状況設定が明らかになる。後にキュアマンの妻となるアントワネットとの最初の出会いの場面である。

最初はギクシャクとしていた対話が次第に親し気になり、ついには抱き合っけてキスをしそうになる寸前で、脇で見ていたキュアマンから「待った！」が入り、「もう一度最初から始められないか？」と彼が要求する。今までキュアマンを演じていた演出家に代わって、今度はキュアマン自身が主舞台に上がって、先ほどと同じ対話を再び始めるのだが、ただし二人が親し気になるきっかけとなる場面から、いわば「過去の修正」を目指した別バージョンの繰り返しとなる。このように修正された別バージョンを探って、次々に展開される「アントワネット無しのキュアマンの伝記 (Biographie ohne Antoinette)」の様々に入り組んだ試みが、いわば後の「ドラマ」の中心となる。

しかしながら試みはことごとく失敗して、相変わらず「こんなはずではなかった。(Es mußte nicht sein.)」という結果につながる。最後には「アントワネットのバージョン」を試み始めようとするところで、舞台上演は一応の終わりを迎える。

冒頭近くで演出家とキュアマンによって繰り返される「こんなはずではなかった。」という肝となる台詞は、二時間近い舞台の最後に近い所でも、さりげなく反復強調されるのだが、この日本語をあらためてドイツ語に戻すと、**Es sollte nicht sein.** となってしまうので、「こんなはずではなかった。」という意識は、ほとんど誤訳に近くなる。もちろん松鶴訳では、これほどに怪しげな訳語にはなっていない。元々の **Es mußte nicht sein.** を正しく訳そうとすれば、「そうであってはならなかった。」あるいは「そうである必要はなかった。」とするのが辞書的には正しく、否定の **nicht** の係りぐあいの解釈の問題が出て来る。しかしそのように辞書的に「正しい」訳だと、いずれにしても、どうも舌を嚙みそうな翻訳調になってしまうので、「そうである必要はなかった。」のかもしれない。

私訳の改訳・怪訳・解(体)訳ぶりの是非はともかく、フリッシュの『自伝』は、中心となるキュアマンの行動や台詞の進行が、常に中断され、再検討され、新たに繰り返され続けるのだから、古典的なドラマによる閉じた時空での直線的な筋・行動 (**Handlung**) の「正しい」ドラマトゥルギーの在り様を大きく逸脱していることが明らかである。

もちろん出来事なり台詞なりの反復をドラマに組み込むこと自体は、とりわけ珍しいわけではなく、特に喜劇ではしばしばお目にかかる技法ではある。場面の反復を効果的に用いたワイルダーの『わが町』などを参照することもできるだろう。先ほどのアヤシイ日本語訳

は、どうもメルヴィルの『バートルビー』での主人公の決め台詞「私はそうしない方が良い。
(I prefer not to.)」に引きずられすぎているかもしれない。

重要なのは、舞台の外側からの介入と反応という相互的な関係性の「見える化」と、それによって生み出される「試み」の多用なあり方であり、さしあたりは演出家とキュアマン、さらにアシスタントの存在による多元化・多様化・複雑化の意識と、それによってもたらされる、安心・安全の確保された統一感の欠落であり、つまりはドラマの「異化」作用ということになる。冒頭の女性アシスタントによる朗読も、いかにも「叙事的」な扱いであるので、その点ではマックス・フリッシュの劇作には、ブレヒトの適用・応用・亜流という側面が強いし、私自身もフリッシュに対しては、そのように表面的な理解しかなかったのであるが、今回の上演に、いささかビックリしているのが正直なところである。

葉柳和則（『経験はいかにして表現へともたらされるか』鳥影社、2008年）の詳細なフリッシュ論によれば、今回の改作版は、1984年の初演当時、ほとんど注目を浴びなかったとのことである。しかし一層の検討を「試みる」に足るだけのポストドラマ的な可能性を、この改作版は強く示しているように思えてならないので、目下、アレコレと取り組んでいる最中である。なんだか肝心な説明の無い予告編にすぎず、怪しげな羊頭狗肉の観劇報告となつてしまったことをお詫びしたい。

寺尾 格（専修大学国際コミュニケーション学部名誉教授）

0190

作成日 : 2022/11/05